

横浜の出版社

# クジラ解体の 写真集を出版

小関さん「議論に役立てて」

る陸での解体風景は、千葉  
県南房総市の和田浦港で86  
年に撮影。「解剖さん」と  
呼ばれる捕鯨会社の作業員  
らが、なぎなたのような長  
い柄の大包丁で、つやつや  
と黒光りするクジラの頭  
や、分厚い脂肪の層を切り  
落とす光景などを生々しく  
伝えている。

「捕鯨の是非を頭だけで  
判断する前に、ありのまま  
を見てほしい。議論するた  
めの役に立つのなら出版  
の意義がある」と話す。

数年前に写真の存在を知  
り、出版に踏み切った横浜



山本 一力  
さん

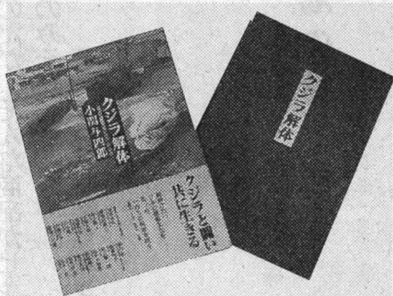
## 敬意伝わる作品

江戸時代のクジラ漁師を  
描いた小説「くじら組」の  
著作がある作家山本一力さ  
んの話。19世紀の米国など  
による捕鯨は鯨油を採るた  
めに皮だけを使い、クジラ  
を絶滅させかねないほどに  
追い込んだ。一方、日本の

伝統的な捕鯨には「命をあ  
やめる以上、血の一滴まで  
無駄にしない」という、信  
仰に近い文化がある。自分  
の命と引き換えにする覚悟  
でクジラという大型動物に  
立ち向かい、食べるために  
必要な分だけを殺し、肉、  
骨、皮、ヒゲまでもすべて  
大事に使ってきた。写真集  
を見たが、細かい説明がな  
くても漁師たちのクジラへ  
の敬意が伝わってくる。日  
本人がクジラにどう向き合  
ってきたかが感じ取れる作  
品だ。

世界で捕鯨の是非をめぐ  
る議論が続く中、写真家の  
小関与四郎さん(75)がマッ  
コウクジラの解体現場など  
を撮影したモノクロ写真集  
「クジラ解体」を出版した。  
1988年に商業捕鯨が規  
制される前の写真が中心  
で、日本の捕鯨文化を伝え  
る貴重な資料として注目さ  
れそだ。

A4判208ページですし  
り重い。写真集の目玉とな



春風社から出版された写  
真集「クジラ解体」

の学術出版社「春風社」の  
三浦衛社長(53)も訴える。  
「ほかの生き物を殺して食  
べることで人間は生きてい  
るといふ事実を見つめ、捕  
鯨をめぐる議論のたたき台  
にしてほしい」

鯨を打ち切るなど、混乱が  
続いている。  
大規模な商業捕鯨に反対  
している環境保護団体グリ  
ーンピース・ジャパンは写  
真集について「日本の伝統  
的な捕鯨文化を否定するわ  
けではない」とコメントし  
ている。

昨年6月の国際捕鯨委員  
会総会は、日本など捕鯨支  
持国と反捕鯨国の、歴史的  
な和解に失敗。反捕鯨団  
体「シー・シェパード」の  
妨害を受け、日本側は今シ  
ーズの南極海での調査捕

8。  
税込み1万5750円。  
全国の書店を通じて注文で  
きる。問い合わせは春風社、  
045(261)316